

月と不老不死 古代中国と日本の月文化（シリーズ・月をめぐる）

朝日カルチャーセンター・新宿教室 2016年11月3日木曜

担当 加藤 徹 <http://www.geocities.jp/cato1963/>

★柿本人麻呂(660-724)の和歌

天海丹雲之波立月船星之林丹榜隱所見（『万葉集』卷七雑歌）

天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ

アメのミにクモのナミたち ツキのフネ ホシのハヤシに コギカクルミゆ

※漕ぎ「進む」ではなく、漕ぎ「隠る」である点にご注目ください。

★『楚辞』天問より 伝・屈原(前343-前278)作の四言古詩

夜光何徳 夜光は何の徳ありてか ヤコウはナンのとクありてか①

死則又育 死すれば則ち又育す シすればスナワちマタ、イクす②

厥利維何 厥の利 維れ何ぞ ソのり、コレナンぞ③

而顧菟在腹 而して顧菟 腹に在り シカしてコト、ハラにアリ④

①夜光(月のこと)には何の「徳」(生得のパワー)があるのか。②死ねばまた生育する。

③一体、どんな利があって、④自分の腹の中に「顧菟」(通説ではウサギで「玉兔」に同じ。ヒキガエル説、「顧」と「菟」説、トラ説もある)を住まわせているのか。

① yè guāng hé dé ② sǐ zé yòu yù ③ jué lì wéi hé ④ ér gù tù zài fù

★各国語の「月」の語源。諸説があります。左は一例です。典拠は省略します。

日本語「ツキ」へ動詞連用形「尽き」の名詞化 cf. トキ(時)へ「溶き/解き」

漢字「月」の字源へ大きく欠けた三日月を描いた象形文字

漢語「月」の語源へ缺(ケツ。常用漢字では「欠」に書き換える)と同系

近代英語 moon へ 中英語 none へ 古英語 mona へ ゲルマン祖語 *menon へ 印欧祖語 *men- へ
印欧祖語 *me- 「測る・計る」

★古代人の世界観

論理的思考 Logical thinking	近現代の科学的な見方や考え方。科学の基礎。
類比的思考 analogical thinking	人間にとって自然な見方や考え方。

以下にかかげる類比的思考は、宗教や芸術、創作の世界などでは今も健在です。
 「目に見えるこの世(現世)の背後には、目に見えないあの世(幽冥界)が広がっている」
 「現世の似ているものどうしは、霊的なパワーでつながっている」
 「現世と幽冥界の境界は、呪術的な方法によって一時的に開くことができる」
 類比的思考による循環世界観を左に示します。

一日	朝	昼	黄昏	夜	朝
一月	新月	三日月	満月	晦日	新月
一年	春	夏	秋	冬	春
一生	出生	若年	老年	死	(再生?)
				(墓の中の生命の更新?)	
					(地下世界での生命の更新)
					(星の林での生命の更新)
					(生命の更新)

cf. 「死と再生の儀礼と演劇の起源」 <http://www.geocities.jp/cato1963/sitosaisei.html>

★『鵷冠子』泰鴻より。中国の戦国時代の、鵷(やまどり)の羽の冠をかぶった隠者に仮託した書と伝えられています。後世の偽書説もあります。

日信出信入、南北有極、度之稽也。
 月信死信生、進退有常、数之稽也。
 列星不乱其行、代而不干、位之稽也。

日は信に出でて信に入り、南北極有り、度の稽なり(太陽の黄道は天空の緯度経度の基準である)。月は信に死に信に生き、進退常有り、数の稽なり(月の満ち欠けは暦日の基準である)。列星は其の行を乱さず、代はるも干さず、位の稽なり(方位の基準である)。

※印欧祖語の月は「計るもの」という意味でした。古代中国人も月を「数の稽」と見なしています。古代の日本でも「日知り」は「聖(ひじり)」で、「月読(つきよみ)」は神の名でした。古代人にとって月齢の周期は、宇宙の数理法則の象徴だったのです。

★『周礼』秋官司寇より。周の文王の息子で西周建国の功臣であった周公旦(前11世紀ごろ)に仮託された書物ですが、実際には、戦国時代の成立とも言われています。

司烜氏掌以夫遂取明火於日、以鑑取明水於月、以共祭祀之明燄、
 明燄、共明水。

司烜しけんし氏は、夫遂ふすい(陽燧ようすい)。夫燧ふすい。凹面鏡わうめんきやうの着火器具しやくしやうきを以て明火を日に取り、鑑かがみを以て明水を月に取り、以て祭祀さいしの明燄めいえん(神靈しんれいにそなえる「しとぎ」と明燭めいじやくとを共そなへ(供え)、明水を共ふるを掌つかさどる。

★『淮南子』覽冥訓より。『淮南子』は、前漢の武帝のころ、淮南王・劉安りゆうあん(前179～前122)が学者を集めて編纂させた書物です。

夫陽燧取火于日、方諸取露於月。天地之間、巧曆不能舉其數、手徵忽怳、不能覽其光。然以掌握之中、引類於太極之上、而水火可立致者、陰陽同氣相動也。此傳說之所以騎辰尾也。

夫かの陽燧ようすい(着火用の凹面鏡。「夫燧」の誤写説あり)は火を日より取り、方諸(大きな蛤)は露を月より取る。天地の間(の距離)は、巧曆(曆学に通じた人)も其の数を挙ぐる能はず(正確な数字を言えない)。手は忽怳こつきやう(はつきりしない物。「恍惚」に同じ)を徴する(つかまえる)も、其の光を覽ること能はず。然るに掌握の中(手で掌握できる道具の中)を以て類を太極(太陽と、太陰(月)の上より引き、而して水火立ちどころに致すべき者は、陰陽の同気、相動けばなり。此れ傳說(殷王朝の人名)の辰尾(天空の星。彗星のしっぽ)説や、「尾」宿説あり)に騎る所以なり。

※凹面鏡という道具を使えば、遠い宇宙の天体である太陽のエネルギーを、地上の火に転換できます。科学が未発達だった古代の人にとって、これは神秘でした。太陽も太陰(月)も、天体は不老不死です。天体のパワーと地上のパワーを同調させれば、いにしえの傳説のように不死のパワーを得られる、と古代人は考えました。傳説は殷の時代の伝説的な人物です。『莊子』大宗師によると、彼は「道」を得て武丁(王の名前)の宰相となり、その後は天上の星になったと伝えられています。

★『淮南子』覽冥訓より「嫦娥奔月」の神話。嫦娥はもともと「姮娥」という名でしたが、前漢の文帝の諱しみな「恒かん」と似た字形を避けるため、後に「嫦娥」と改名されました。

羿請不死之藥於西王母、姮娥窃以奔月、悵然有喪、無以統之。

羿げい、不死の藥を西王母に請こふ。姮娥ぬす、窃みて以て月に奔はしる。悵然うしなとして喪うしなふ有りて、以て之に続くこと無し(彼はがっかりして、逃げた妻を追いかける気力もなかった)。

※羿は太古の弓の名手で、射日神話でも有名です。嫦娥は羿の妻でした。彼女が自分だけ不老不死の藥を飲んだいきさつや、彼女のその後の運命については、後世、さまざまな説話が語られています。

★唐の詩人・李商隱(812-858)が詠んだ七言絶句「嫦娥」。自分を裏切って去っていった女性を嫦娥になぞらえて詠んだ、という説もあります。

雲母屏風燭影深 雲母の屏風 燭影深し ①

長河漸落曉星沈 長河 漸く落ちて 曉星沈む ②

嫦娥応悔偷靈藥 嫦娥は応に悔ゆるべし 靈藥を偷みしを ③

碧海青天夜夜心 碧海 青天 夜夜の心 ④

①ウンモのビョウブ、シヨクエイ、フカシ。②チヨウカ、ヨウヤクオちて、ギョウセイ、シズむ。③ジョウガはマサにクゆるべし、レイヤクをヌスミシを。④ヘキカイ、セイテン、ヤヤのココロ。

①雲母がキラキラと輝く屏風。ロウソクのともしびの影が深い。②夜はふける。天の川もだんだんと落ち、明け方の星も沈みゆく。③嫦娥はきつと後悔しているだろう。不老不死の靈藥を盗んでしまったことを。④みどりの海、青黒い空、毎夜の孤独な心。

① yún mǔ píng fēng zhú yǐng shēn ② cháng hé jiàn luò xiǎo xīng chén ③ cháng é yīng huī tōu líng yào ④ bì hǎi qīng tiān yè yè xīn

★謡曲『邯鄲』の詞章より

月人男の舞なれば、雲の羽袖を重ねつ、
喜びの歌を、謡ふ夜もすがら。

★樂史(930-1107)の伝奇小説『楊太真外伝』に引用する「霓裳羽衣曲」の起源説話二種のうちの二つ

又『逸史』云、羅公遠天宝初侍玄宗、八月十五日夜、宮中玩月、曰「陛下能從臣月中遊乎」。乃取一枝桂、向空擲之、化為一橋、其色如銀。請上同登、約行数十里、遂至大城闕。公遠曰「此月宮也」。有仙女数百、素練寬衣、舞于広庭。上前問曰「此何曲也」。曰「霓裳羽衣也」。上密記其声調、遂回橋、却顧、隨歩而滅。且諭伶官、象其声調、作霓裳羽衣曲。

又『逸史』に云ふ。羅公遠(有名な道士の名)、天宝(742-756)の初めに玄宗に侍す。八月十五日(中秋節)の夜、宮中に月を遊ぶ。曰く「陛下、能く臣に従ひて月中に

遊ばんか(遊びにゆきませんか)と。乃ち一枝の桂を取りて、空に向ひて之を擲なげうてば、化して一橋と為る。其の色、銀の如し。上(皇帝への敬称)に請ひて同じく登り、約行くこと数十里、遂に大城闕に至る。公遠曰く「此れ月宮なり」と。仙女数百有り、素しろき練ねりまぬの寛ゆるき衣にて、広き庭に舞ふ。上、前すみて問ひて曰く「此れ何の曲ぞ」と。曰く「霓裳羽衣なり」と。上、密かに其の声調(曲のメロディー)を記す。遂に橋に回り、却りて顧れば、歩みに随かたじひて滅す。且あした(翌朝)に伶官(音楽担当の役人)に諭し(勅令をくだし)、其の声調を象かたじりて霓裳羽衣の曲を作らしむ。

★唐の詩人・李賀(791-817)が詠んだ七言古詩「夢天」(天を夢む)。月の上から、杯さかづきのようにまるい地球が雲と海水におおわれた情景を描写しています。

老兔寒蟾泣天色 老兔 寒蟾 天色に泣く①

雲楼半開壁斜白 雲楼 半ば開きて 壁 斜めに白し②

玉輪軋露湿团光 玉輪 露に軋りて 团光を湿し③

鸞佩相逢桂香陌 鸞佩 相逢ふ 桂香の陌④

黄塵清水三山下 黄塵 清水 三山下⑤

更変千年如走馬 更変すること千年 走馬の如し⑥

遥望齐州九点煙 遥かに望む 齐州 九点の煙⑦

一泓海水杯中瀉 一泓の海水 杯中に瀉ぐ⑧

①ロウト、カンセン、テンシヨクにナク。②ウンロウ、ナカバヒラきて、カベ、ナナめにシロし。③ギョクリン、ツユにキシリて、ダンコウをウルオし、④ランパイ、アイアウ、ケイコウのミチ。⑤コウジン、セイスイ、サンザンのモト、⑥コウヘンすることセンネン、ソウバのゴトし。⑦ハルかにノゾむセイシュウ、キュウテンのケムリ、⑧イチオウのカイスイ、ハイチュウにソゾぐ。

①雨模様の夜空。月の中の、老いた兔と寒々としたガマガエルが流す涙が、ポタポタと降る。②夜の雨雲は、黒い楼台のようにそびえたつ。雲の扉がなかば開き、雲の壁が斜めに白く輝く。③月の光だ。天空をすすむ宝石の車輪は、ギギイッと露を散らしつつ、まどかな濡れた光を發する。④(私の魂は雲の階段をのぼる)天への道は、月にはえている桂のおりに満ちていた。天の道を、仙女たちが、靈鳥の鸞を彫りこんだおびだまをシヤラシヤラ鳴らして歩いてくる。⑤(月へと昇る私は、下界をふりかえった)太平洋の中の三つの仙島のあたりでは、黄色っぽい塵のような大地と、青青とした海の水が、滄そうそう桑そうの変をめぐるしくくりかえしている。⑥宇宙から見れば、千年の歳月も、馬が走り去るような一瞬にすぎない。⑦はるか中国のほうを見おろすと、点のような煙が九つ、ポツンと見えるだけ。⑧(地球の姿は)まるい杯の中に注がれた、ひとたまりの海の水のようだ。

- ① lǎo tù hán chán qì tiān sè ② yún lóu bàn kāi bì xié bái ③ yù lún yà lù shī tuán guāng
 ④ luàn pèi xiāng fēng guì xiāng mò ⑤ huáng chén qīng shuǐ sān shān xià ⑥ gēng biàn qiān
 nián rú zǒu mǎ ⑦ yáo wàng qí zhōu jǔ diàn yān ⑧ yī hóng hǎi shuǐ bēi zhōng xiè

★『十訓抄』（じっきんしょうじっくんしょう。1252年成立）第十「才芸を庶幾すべき事」第64話

唐の玄宗の帝、年ごろ月を愛する志深くして、夜々むなくし給ふ事なかりけり。道士、これを感じて帝に申すやう「君、月を愛し給ふこと、年久し。月の中を見せ奉らんと奏しければ、帝、悦びてしたがひ給ふ。

道士、八月十五夜の月の午時（午夜の誤りか）ばかり、庭に立ちて、桂の枝を月に向ひて投げ上げたりければ、銀の階、月の宮に続きけり。この時に道士、先立ちて引き奉る。昇ることいくほどならずして、月の内に入り給ひぬ。玉の宮殿、玉の楼閣、数知らず。舞台の上に、十二人の妓女舞ふ。おのおの白衣を着たり。楽の聲、舞の姿、のどかに澄めば、玉を動かすかんざし、雪をめぐらす袖、みな光り輝けり。二階の宮殿あり。薨ごとに玉を磨きて、目もあてられず。玉の簾を上げて、一人の主これを見る。すべて、もの音、舞の姿、所のありさままでも、心もおよび給はず。斧の柄も朽ちぬべく思されけれど、名残惜しながら、舞だに見はてずして、帰り給ひにけり。

帝、この曲を心にしめて、世にとどめ給へり。盤渉調の聲なり。霓裳羽衣といふ、すなはちこれなり。中ほどばかりを見給ひけるによりて、始終もなき樂なりといへり。ただし、このことおぼつかなし。古き目録にも「霓裳羽衣は越調の樂なり。もとの名をば越波羅門といひけるを、同じ帝の時、天寶年中に、もとの名を改めて霓裳羽衣と名づく」と記せり。よくよくたづぬべし。

★『竹取物語』（成立年代不明。9世紀後半～10世紀前半か）の結末です。「富士山」の語源は「不死山」、という説話です。

中将、人々引き具して帰りまゐりて、かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。菓の壺に御文添へ、まゐらす。広げて御覧じて、いといたくあはれがらせたまひて、物も聞こし召さず、御遊びなどもなかりけり。大臣・上達を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせたまふに、ある人奏す、「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近くはべる」と奏す。これを聞かせたまひて、

会ふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ菓もなにかはせむ
 かの奉る不死の菓に、また、壺具して、御使ひに賜はず。勅使には、つきの岩笠といふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂に持てつくべき由仰せたまふ。嶺にてすべきやう教へさせたまふ。御文、不死の菓の壺並べて、火をつけて燃やすべき由仰せたまふ。その由承りて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山をふじの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へ立ち上るとぞ言ひ伝へたる。

以上